

平成22年度小笠原編受講生の感想より

本授業についての理解を深めいただくために学生の承諾を得て、平成22年度小笠原編受講生の全学生の本講義の性質に関するレポート（1～3）をそのまま掲載いたします。

1、「自然と社会と文化」の内容や目的などの特徴について、他の都市教養プログラムなどの科目とも比較しながらまとめなさい。

2、本科目を履修したことで、その受講目的に照らして自分にとって最も良かったと考えられることを具体的に述べなさい。

3、この科目をより良くするために改善点やしたいことや新たな事などを提案してください。

4、最後に率直に感想を述べてください。

下線等、原文まま。

人文・社会系1年女子

1、この「自然と社会と文化」というプログラムは東京都小笠原諸島の父島に大型船で渡り、その自然と文化を学ぶというものであった。内容としては、大きく自然と言語と歴史の3つに分けて学習した。

自然分野では自然保全の講義を受けたり、山の自然体験教室で小港から中山峠まで山の動植物の解説を聞きながら散策をしたり、海の生物を潜って観る体験教室をした。言語の分野では、小笠原ことばはなぜ面白いのか、重要かということについて講義を受け、島で使われている島言葉を探したりもした。歴史の分野では、小笠原の歴史や戦跡の野外講座をしたり、戦争時代の話を島民の方々に聞いたりした。

このプログラムの特徴は、実際にその場に行って学習できることだと思う。他のプログラムは、机に座って話を聞いて想像するだけで終わってしまうが、このプログラムでは実際に小笠原諸島に行き、講師の方々に話を聞きながら実際にその風景や状況を見ることができ、「想像」も「創造」もできる、いわばフィールドワーク型の授業だと言える。

2、私がこの科目を履修して最も良かったと思えたことはたくさんある。中でも2つ挙げたいと思う。1つ目は、学部の違う同じ年代の人たちと行動を共にし、ディスカッションで意見を交換し合ったことによって考え方の違いに気が付けたこと。2つ目は、小笠原の歴史や自然や文化について直接目で見て、手で触れ、五感で感じ学んだことによって小笠原諸島の尊さに気づけたことだ。

1つ目については、人間の数だけ考えがあって、それは違う分野の勉強をしている人間だとより顕著に違ってくる。それは視点が違うから当然と言えば当然なのだが、実際にその意見の違いを感じると結構ショッキングだった。この経験を通して、色々な立場の人間がいてこういう意見の違いがあるからこそ人間の争いやいざこざ、意見の不一致は起こるのだとわかったことはかなりの収穫だったと思う。

2つ目については、私は最初飛行機を無理にでも作ってしまえばいいとか、小笠原の固有種なんて守る必要は無いだとか色々なことを思っていたのだが、小笠原で過ごすうちに、それでは駄目だと感じ始めた。空路を作って簡単に小笠原に来られるようにしてしまったら、おがさわら丸の感動的なお見送りの文化も廃れてしまうかもしれないし、小笠原の自然を壊すことや経済の動きまでも壊すことになりかねない。それに、もし動植物の種類が減ったらさびしいし、生態系にもなんらかの影響が出てしまう。小笠原ならではの多様な歴史や文化や生物を守ることは日本にとって大切なこと

なのではないかと思った。

3、 今回のプログラムは結構色々なことが詰め込まれていたもので体力的に限界に近かった気がする。小笠原で体験すべきことや見なければならぬものが多くてスケジュールがキチキチになるのもわかるが、もう少し島民の方と自由に話して島の雰囲気を楽しめる時間が欲しかった。あとこれはただの願望だが、イルカと一緒に泳いでみたかった。今回は期間中ずっと海が穏やかでイルカに会える確率が高かったのもそれが若干の心残りである。

内地に帰ってきてからふと思ったので現地では提案できなかった。

4、<感想>

今回、小笠原諸島に実習に行くことが初の試みだったということで若干の不安はあったのだが、行ってみたら色々な体験もできて非常に濃く充実した3泊6日を送れて本当に良かった。最初は船で25時間半なんてとてもじゃないけどつまらなくて耐えられないだろうなと思っていたのだが、乗ってみたら船の中での体験も貴重なものが多くて25時間半が貴重なものを感じられた。

講義や野外講座で普段自分の学部には学べないことや、わからないことを学べたことがとても面白かった。自然と直接触れ合って学習するのは、机の上でノートと教科書を広げて勉強するよりずっと興奮するもので、自分の実になったと思う。小笠原に住んでいる人達が同じ東京都民なのだと考えるとちょっと不思議な感じがする。あんなに大自然があって、人間の温かみを感じられるのに東京というのがうらやましい。同じ東京なら小笠原に住みたくなってもしかたないと思う。大学祭までに小笠原フラと南洋踊りをマスターして発表したい。そして、これからは色んな人に小笠原の素晴らしさをわかってもらえるように広めていきたい。

ヒューマンメカトロニクスシステム2年男子

今回、首都大学東京の都市教養プログラムの小笠原野外集中講義「自然と社会と文化」に参加して様々な体験をさせていただきました。やはり普通の教室での講義と違って、実際に現地に行って五感を使って学ぶ事が出来るというのがとてもよかったです。僕は前からこの小笠原諸島にずっと行ってみたいと思っていたので、本当に参加出来てよかったです。自然と社会と文化を学ぶというのがこの授業の目的でしたが、この講義の良かったことは、島の人たちの色々な話が聞けて、可知先生やロング先生や島の講師の方による野外講座があって、南陽踊りやフラダンスの体験があってと盛りだくさんで、最も良かった事を挙げるのが難しいくらいです。自分の中で一番印象深かったのは、やはり小笠原の歴史講座です。島の至る所に防空壕があったり、沈没船や墜落したヘリコプターなどがあったりと、今でも島に戦跡が残っていたのは本当にびっくりでした。今でも目に焼き付いています。大平京子さんや大平レンスさんの話を聞いても、戦争の恐ろしさを改めて実感しました。実際には行ってないのですが、ビジターセンターに展示してあった硫黄島の歴史も自分の中では衝撃的でした。もっと小笠原諸島や硫黄島の歴史が知りたいと思っています。

他にも、印象深かったのが島の自然です。辺りを見回しても、バナナやレモンがなっていて、夏なのに蝉がいなくて、山に生えている木も違って、野ヤギがいて、そして何よりもあの青い海は本当に綺麗でした。あの感動は忘れられません。

最初は人がなかなか行けない離島に行ってみたいというくだらない理由で小笠原諸

島に興味を持ったのが、今回のプログラムで文化の違いや島独特の自然・環境、そして島の人たちとのふれあいを通して、本当にたくさんの事を学ぶことが出来て良かったです。何から何まで違った環境だったので、異国にいた気分でした。ただ、個人的に同世代の人がどんな生活をしているのか気になったのもっとそのような人と交流してみたかったです。来年は島の子どもの話も聞けるといいと思います。提案しなかったのは、船になってからそう思ったので遅かったです。すいません。去年は一人で父島に行こうとしていたのですが、それも特に目的もなくただ行ってみたいって感じだったので、このようなプログラムを用意して下さいました大学や先生方、TAの方には本当に感謝しています。ぜひこのプログラムを来年も再来年も続けて、後輩たちにもこの小笠原の素晴らしさを体験してほしいです。本当にありがとうございました。

人文・社会系1年女子

1、一番の特徴は少人数制であることだと考える。キャンパス内で行われている（私が受けている）講義式の他の都市教養プログラムの受講生の数が非常に多い。そのため疑問点が出てきてもその場で聞くことがなかなかできない。また授業後に聞こうと思っても、10分間という少ない時間では次の授業で移動があったり、既に他の人がいると質問が中途半端で終わったり、質問することすらできない場合が多い。メールで質問対応してくれる先生も多いが、返信がくるまで疑問が解消されない、メールではなかなか伝わりにくく（分かりにくく）、実際に質問する方が質問も答えも的確に理解できる。そのためあまりメールでの質問を使用したいとは考えない。そのため大人数講義式の都市教養プログラムでは疑問が残り、授業内容をしっかり消化できないことが少なくない。しかし当講座では少人数制をとっており、また一定の期間一緒に生活することで、教授、院生との距離が非常に近く、受講生同士も仲良く、また抽選であったため受講生皆各々の意識が高く、真剣に講義を受けていた。そのためちょっとした質問でもすぐにできる環境が整ってあった。おかげで自分の専門もそうでない分野ともども深い理解ができたし、「わかる」ということで興味がどんどんわいていった。

また様々な学部、分野、学年が集まりディスカッション出来ることも当講座の特徴である。他の都市教養プログラムではやはり分野は傾いてしまうし、講義中心であるためディスカッションを行うことがまず少ない。しかし当講座で講義後に毎回ディスカッションが設けられていて、自分だけの偏った理解で終わることなく他の人の意見を取り入れることができ、理解・興味がさらに広がった。そのディスカッションをするメンバーが自分とは違う分野の人がいるので、自分では見られない、思いつかないような観点からの意見もきくことができ非常に面白かった。

2、学問領域の枠を超えた学習、それも直接自分が物事に目の当たりにできることが非常によかった。帰りの船で筑波大学の世界遺産専攻の方々がいたが、私も世界遺産にとっても興味がある。しかし今までは世界遺産の中でも文化遺産にしか興味がなく、自然遺産に特に憧れを抱くこともなかった。また日本人は地球温暖化に対して疎い（問題自体を知っていても世界と比べるとなかなか具体的な行動に移さない）私もその一人であった。このように自然とりわけ植物に全く興味がなかった。そのため事前に渡されたプログラムでの自然講座がとても憂鬱であった。しかし当講座小笠原ではあまりに美しい景観を見て、またその景色を作る植物、海などに関する知識が詳しく

聞くことができた。それによりどうやったらこの美しさを守っていけるのか、固有種保全はどうしていけばいいのか、しかしそれは人間のエゴではないのかなど、今まで興味が全くなかった事に対してどんどん興味がわいていった。この講座の目的でも学問領域を超えた問題認識とあるように、自分の価値観が広がったこと、自然の美しさ・重要さに対して今までよりもさらに感動できるようになったことが非常に良かった。

3、島民とのふれあいがもっと欲しかった（最終日のフリータイムぐらいしか話せなかったのだ）。学校内の教授・院生・受講生での関わり合いが多くそれは上に記したように良かったのだが、現地の人と関わるのが少なかったように感じる。もっと現地の人、できたら自分達と同年代の人と、空港建設について、固有種保全についてなど小笠原に関する対話・ディスカッションをする機会が持てたらよかったと思う。とても難しいことだと思うが、今回最後の夕食では島の食堂にてみんなで食べたが、それを少人数に分けてそれぞれ現地の家庭にお邪魔させてもらってその人たちと一緒に食事とることなどができたらよいのではないかと思う。島民と触れ合うことでとりわけ文化・言語系の講義、課題がより充実するのではないかと思う。

また講義の班各々のディスカッション内容をもっとしっかり他の班とも共有すること、メンバーを何回か変えることがあればさらにディスカッションは良いものとなったと考える。毎回固定するのではなく、せつかく様々な分野から集まっているのだから、また同分野でも考え方、とらえ方は人それぞれだと思うので、いろんな人とディスカッションして様々な意見を聞きたかった。

人文・社会系1年女子

1、この授業が他の都市プロと最も異なるのは、現地で本物の自然、社会、文化というテーマに直に触れることを通して考えを深めていくところだ。学生自身が感じたことから、それぞれの授業や世界が広がっていく。他の都市プロでは、講義を聞くことが授業を受けるということで、聞いたことから自分で考え、調べてその知識を得ることが学ぶということになることが多い。それに対し、この授業では五感をフルに活用して全身で授業を受け、講義を聞いて、いろいろな人の話して、他の人と関わり合いながら自分なりの答えを見つけていく。得られるものは知識だけではなく、その知識をもと編み出された自分なりの結論、同じ時間を過ごして違う感想を持った他人の考えなど様々で、決して受け身だけでは終わらない授業だ。人数も少ないので、分からないことがあったら気軽に質問でき、教授も身近に感じられるのも特徴だと思う。

2、その場で、先ほどまで聞いていた講義の議論、グループ内でお互いの考えを分かち合うという体験ができたことが私にとってこの授業で最もよかったことだと思う。今まで私は人とディスカッションすることがあまりなく、話されたばかりのホットな話題を人と共有しあうなんてことはもちろんしたことがなかった。普段の私は講義は聞きっぱなしで、あとで考えるにしても自分ひとりで完結させていたからだ。そういうわけで、これは他の人には当たり前のことだったかもしれないが、私にとってはとても貴重な体験だった。他人の考えを真剣に受け止めることが、新たな視点を与えてくれるだけではなく、自分の考えを更に深めるスパイスになる。ちょっとした一言でも、一生懸命に紡がれる言葉には、深みがある。そんなことに気づくことができ本当によかった。

3、新たな提案として、自然系だけでなく、社会や文化についても、貴重なお話の

基となるような事前学習課題を取り入れたらどうだろうか。

もちろん、これは私個人の反省点でもあり、私自身がもっと事前学習に力を入れるべきただけともいえる。外来種については事前レポートがあったため、多少の知識を得たうえで現地に行き、そこで調べてきたものの現実を目の当たりにし、もう一度頭の中で捉えなおすという過程を踏むことができた。だが、単なる私の勉強不足であるが、小笠原の歴史、戦争のときの状況などはまったくと言っていいほど知らなかったため、せっかく貴重なお話を聞く機会がたくさんあったのに、それをより効果的に利用することができなかった。初めてその場で聞くのと、薄くても下地があって聞くのではそのことに関する興味も、洞察力も、理解力も全然違ったものになってしまうし、結果として自分自身に還元されるものの大きさにも差が出てしまう。自分の問題ではあるが、そのことがすごく残念だった。

もし、歴史や文化系の事前課題があったら、もっともっと授業を自分にとって充実したものとして受け入れられたと思う。人は興味がないことには本当に目がいかないので、私の他にも同じような気持ちになった人が少なくとも一人くらいいるはずだし、課題となれば軽い気持ちで調べるのとは違って誰もが懸命に取り組むだろう。このことを現地で提案できなかった理由は、このことが個人の問題のように思えたとし、他人に頼りすぎで、大学生としての私の甘さがあまりにも透けて見えるようで情けなかったからだ。だが今振り返ると、自分の恥を恥と開き直れないで往生際が悪かったと後悔している。

4、＜感想＞

5泊6日があったという間に過ぎてしまったという感覚だけが今もまだ残っている。初めてすることだらけだった。この授業を受けなければ知らないままに終わってしまっただろうこともたくさんあった。全てを鮮明に覚えておくことはできなくとも、この授業のことはずっと忘れないだろう。実際に体験することを通して、考えが深まり、他人の話聞くことによって得られるものによって、毎日毎日視野が広がっていろいろなことを考えさせられた。人と話すのが苦手な私も、しゃべらなければ何も伝えられないと、周りのひとから多くのいい刺激を受けた。しかも、この授業で学んだことは、日常生活にも応用できることばかりだった。ともすれば、だらけがちだった私の大学生生活に喝を入れられたような気分だ。もっと自分で考えたことを自分の言葉で話せるようになりたいと強く思ったし、もっともっといろいろな人と話してみたいとも思えるようになった。この思いを忘れずに、どこかでつらくなっても前向きに頑張っていきたいと思う。

こんなに貴重な体験をありがとうございました。

人文・社会系1年女子

1、「自然と社会と文化」では、東京都に属する島諸地域をキャンパスとして、島のなりたち、歴史、自然、くらし、文化などを学ぶ。そして通常の授業のように、教授一人に対し大人数の学生で、大教室で講義を聴き、机に向かって勉強するといった形式で行うのではなく、少人数の講座で、授業に関わる人たちと寝食を共にし、実際に山を歩きながら動植物を観察したり、島民とコミュニケーションをとったりすることによって自分の肌で感じたことを、学生どうしが発信し合うことがこの授業の特徴であると言える。

2、わたしがこの授業を受講しようと思ったのは、船で25時間半もかけなければ行けない小笠原とは、一体どんな場所なのだろうという疑問を持ったことと、発言することやコミュニケーションを取ることが苦手な、消極的な性格を変えるきっかけになるのではないかと思ったことからである。この野外講座に参加した人とも、寝食を共にして様々な活動と一緒にすることで、どう接すれば良いのか分からなかった状態から、自分なりによい関係を築けたのではないかと思う。また、南洋踊りをステージで踊ったことや、帰りの船での、学外の人を交えての発表会は、普段前に出る経験があまりなかったわたしにとって、とても刺激的であった。筑波大の院生の方たちとも短い時間ではあったが交流することができ、たくさんの、その時にしかない人との出会いをもっと大切にしようと思うことが出来た。小笠原フラの体験も、今までならば恥ずかしい、という方の気持ちが勝っていただろうが、今回の講座では心の底から楽しい、おもしろい、という感情でいっぱいであった。めったに来ることができない小笠原に来たからこそ、今しか出来ないことを楽しもう、という気持ちが大きかったのだと思う。そして、常にそういう心持ちで過ごしていけば、人生がもっともっと楽しいものになるのではないか、ということに気が付くことが出来たこと、少しではあるが自分に自信を持つことが出来たことが一番の収穫であったと思う。

3、毎日なにかしらのテーマで、グループでディスカッションをしたが、それを全体で発表する時間がなかったのが残念だったと思う。ほかのグループの人たちがどのような考えを持っていたのか、自分たちの考えはほかの人たちにどのように受け止められるのかを知りたいと思った。

4、＜感想＞（「My 小笠原」を兼ねます）。

小笠原に到着して船を降りたときに、風景が、色が、鮮やかだな、と感じました。空も海も山もものすごく綺麗で、綺麗って言葉じゃ足りないけれど、でもやっぱり言い表すには綺麗って言葉しかないな、ともどかしさを感じました。わたしが小笠原で過ごした中で一番印象に残ったのは、歌です。南洋踊りの歌、小笠原フラの歌が耳から離れなくて、内地に戻ってきてからもずっと歌っています。歌詞の意味が分からなくて、時間がものすごくゆっくり流れる感じがして、心が穏やかになっていくような気がします。小笠原の人々はみんなせかせか急いでいなくて、丸木舟のような歌が歌われているのもすごく良く分かります。でも、そんな小笠原でも村を歩けば必ずグリーンアノールに会い、昼間でも蝉は鳴いておらず、山には外来植物が蔓延っていたし、痛々しい戦跡もいくつも目にしました。事前学習として、外来種のこと、歴史のことはある程度頭に入れていましたが、自分の目で実際に小笠原の現状を見るまではまだ本の中のお話、という感じでした。はじめわたしは、なぜ小笠原の自然、歴史の跡やことばは大切なのか？守らなければいけないのか？と疑問を持っていました。今もまだうまく言葉にはできないけれども、あの美しい景色を見た後では、ああ、これは守らなきゃ、残さなきゃ、小難しい理由なんか知らない、という気持ちです。講座を終えて、家族や友人に小笠原の事を話しても、ほとんどの人がまず小笠原がどこにあるのかわからないし、そもそも島だと思ってない人もいました。これが現状か、と悲しくはなりましたが、だからこそ小笠原の事をたくさんの人に教えたい、そして訪れて欲しいと思います。

1、他の都市教養プログラムは教室の中に入り、椅子の上に座って先生の授業を聞くものである。しかし、この授業は全く異なっている。実際にその現地に行って、自分の肌で小笠原を感じるというものである。

当日の朝、起きることからこの授業は始まっている。僕たちが乗る小笠原丸は10:00出港なので、それに遅れたら、もう船はない。つまり、この授業全体を受けられなくなるわけだ。

また、他の都市教養プログラムでは教室の中で先生の話聞くだけなので、実際にその事柄を自分の目で見ることはできないため、「なんとなく」でその理解が終わってしまう。しかし、この授業では、先生がレクチャーした内容、自分が事前課題で調べてきた内容が、すぐに自分の五感を使って感じるができるのだ。レクチャー+野外実習のダブルパンチで自分の中に残る体験ができる。自分の肌を使って小笠原を感じるというものは予想以上に刺激があった。

また、他の都市教養プログラムは自然と社会と文化を並行して学ぶことはあまりなく、それらのうちの1つに的を絞って学ぶが、この授業ではそれらを並行して学ぶことで横断的に小笠原について学ぶことができ、より広い知識を得ることが出来ただけでなく相互関連を意識した知識も習得できた。

2、良かったのは、現地に通じる教授の方や研究者の方と一緒にいくことで、個人で観光に行くだけでは出来なかった体験や出会いがあったことである。

また、12人という少人数で行くことで気軽に積極的に先生方や講師の方に質問をすることができ、多くの知識を実際の体験とともに、身につけることが出来た。また毎晩行われた、班ごと(3人)に分かれてのグループディスカッションは3人+先生という少人数かつ人文系+生物系という構成要員であったため、様々な意見が飛び出し、面白い討論であった。

小笠原について人文系と生物系の両方を並行して学ぶことで、片方の枠にとらわれない総合的な考え方を学ぶことが出来た。例えば外来種による固有種の保護の問題であれば、それを生物系だけの問題として検討するのではなく、小笠原の文化の保護の問題とも関連付けて考えるといったように。これも、専門科目ではなく教養科目(都市プロ)ならではの利点であると思う。

人文・社会系1年女子

1、他の都市教養プログラムのように、教室で専門的分野を学ぶのではなく、実地に自ら赴き、特徴ある民族・文化や豊かな自然と美しい海洋環境を観察、調査するという自らの体験を通して、学問的領域を超えた総合的な問題認識、判断、考察する能力を高めることを目的とする。内容は学外講義の事前に1限行われる学内講義と、島嶼で行われる学外集中講義に分けられ、島の文化と歴史、民族と言語、海洋環境、自然環境などのテーマを関連付けながら総合的に学習する。各テーマとも、実習(見学、体験、観察、調査等)および講義・討論からなる。

2、私が本科目を履修した目的は、小笠原特有の自然環境と生態系保全の現状を実際に見て、学ぶことであった。受講前、私は単に人間が持ち込んでしまった外来種を駆除すれば小笠原の元来の自然を取り戻せると思っていたが、現在の小笠原の自然では在来種や固有種より外来種が私たちの目に入るところに生息しており、しかも数は圧倒的に上回っているため、完璧に駆除するには尋常じゃない時間と労力がかかるこ

とに気づかされた。最も印象的だったのは、外来種がすでに小笠原の一部となっていることである。Aを減らせばBが爆発的に増え、Bを減らせばCが絶滅の危機に陥る…といったように、外来種は小笠原の生態系に組み込まれていたのである。私にとってこれは大変なショックであった。小笠原の自然に照らして考えた世界的自然環境も、同じことが言えるとなれば、いかにこの問題が一筋縄ではいかないことに気づかされた。これは自然環境保全に興味がある私にとって、本科目で気づかされた最もよかったと考えられることである。

3、本科目で今回、小笠原は初だということで料理当番が適当だったので、結果的に1、2班が食事を準備する回数が多くなったので、そこは平等にして欲しいと思いました。これは現地でも言っていました。

4、＜感想＞

単に旅行するより、ずっとずっと得るものが多く最高でした！！

機械工学2年男子

1、まず普通の都市プロは学校の教室に来ている間だけ授業を受けて後は自分で復習などをするだけです。それに対して、私はこの授業は小笠原にいた6日間すべてに学ぶべき物事が凝縮しているように思いました。

入港してからのメインストリートの街並み、あらゆる木々が混生している山々、その日の目的地に向かう途中だけでも発見することがたくさんありました。

もちろん小笠原に行くにあたって外来種による問題などは自分で調べましたが現地で実際に見てみると容姿が美しく、固有の種に思える植物も実は外来種だったなど本などで見るだけでは分からないことがあると思いました。

また自分は過去に同じ都市教養プログラムで現場体験型インターンシップを受けたことがあります。江東区にある港湾管理会社で一週間ほどの企業研修でしたが社会の仕組みや電話対応といった社会人としてのマナーなど学んだことはたくさんあります。小笠原では自然と社会と文化と銘打っているだけあってそれら全てに総合的に学んだ非常に有意義な授業だったと思います。

2、**および＜感想＞**自分が小笠原野外講座を受講したのは行ったことのない場所へ行って自分の視野、世界観を広げようと思ったからです。小笠原に行く前は同じ目的でヨーロッパのドイツにいましたが小笠原に着いた時にここは独特な街だと感じました。欧米のようなオープンスタイルの店や日本のマンションや一軒家が混在する、日本や欧米とはまた異なる街並みだと思いました。また山々を見ても内地で見るような山と違ってよく見ると様々な種類の木々から成り立つ山だとも気付きました。さらに小笠原では小笠原ことばという言葉があってそれは標準の日本語に英語や八丈島の言葉が混ざったものです。

小笠原は自然も文化も在来、外来を問わずあらゆるものが融合して出来た多様性のある街だと思いました。

小笠原に行ったことでこのように自分は思い、視野を広めたいという受講目的に適ったものだと思います。

3、今回で改善すべき点はディスカッションの際に全体で意見交換をする点だと思いまいた。ディスカッションの間は気付くことができなかつたのですが、ディスカッションでグループごとにまとめた意見をみんなに発表すれば更に自分の考えを変え

ることができるかもしれませんが、意見をまとめる必要がでてくるのでより目標のはっきりとした討論にもなると思います。

生命科学2年女子

1、この授業は、一言で言うと、自主性を高めることが出来る授業でした。小笠原という普段では絶対に行けない場所に行き色々と感じたり学んだりするために、自分からどんどん学んでいくことが多くなりました。また、他の都市プロとは違う面がたくさんありました。

課題設定からして、他の都市プロとは異なっていました。他の都市プロは先生の講義を屋内で聞いて、テストやレポートで単位をもらいますが、この講義では自分が学びたいことを自分で選択し、自分から学んでいきます。例えば、事前学習で行ったことは、自分が興味を持った外来種を調べることでした。テーマとして「外来種」ということは条件づけられていますが、内容はほとんど自由でした。また、小笠原に滞在している間に自分が感じた「小笠原」の音を録音する「サウンドスケープ」の課題も他には無いものでした。

また、この講義では一緒に受けている他の学部の仲間との交流も大切になるということも分かりました。他の都市プロではここまで交流を深めることはできなかったと思います。

最後に、この都市プロを通して学んだことは、自分の「思い出」として、とても心に残りました。「思い出」としてここまで心に残っている授業は他にはありません。

2、私にとって、この科目の受講目的は、小笠原の自然を通して、外来種と固有種の関係についての理解をもっと深めることでした。それについて最も良かったことは、現地に行くことで、外来種の実態を肌で感じる事が出来たことです。

小笠原の山中を巡り、一番印象に残っているのが、外来種であるアフリカマイマイの殻をつけた固有種のおカヤドカリでした。外来種という固有種を脅かす悪者、というイメージでしたが、外来種に頼っている固有種も存在していて、外来種をすぐ駆除するのは難しい、という講義を受けたばかりなので、その実態を間近で感じる事が出来て良かったと思います。

3、この講義は自分の思い出にもなったし、これから自分がどうやって生きていくか、ということにも少なからず影響を与えてくれたので、改善するところという思い浮かばないのですが、少し思ったのは、もう少し時間割に余裕をもったらどうか、ということです。

今回の講義で、予定が詰まり過ぎて、最終的に後倒しになってしまい、船の中で最後のまとめの発表をするということになりました。今回は船酔い者も出ず、運よく波が荒れていなかったのが発表で来ましたが、通常だと発表どころじゃない場合もあると思います。予定が入っていて無駄な時間がほとんどなかったという面では良かったのですが、もう少しゆとりをあってもいいのでは？と、帰ってから感じました。

生命科学1年女子

1、この講座は数ある都市教養プログラムの中でも珍しい、学外夏季集中講座である。だがこの講座の本当の特色は野外に出ることではなく、「複数のテーマを関連付け

ながら総合的に学習する」ことにある。

今回わたしがこの講座に参加した理由は、小笠原の自然である、固有の動植物を見ることだった。文化面にはほとんど興味がなかった。各自でテーマを決めてレポートを作ると聞いたので、自然系の情報のみ仕入れてくるつもりでいた。しかし現地の文化は予想以上に興味深いものだった。島では南陽踊りやフラダンスをおそわったのだが、運動嫌いなわたしにとって、踊りが楽しかったことは初めての経験だった。また、内地ならとっくに撤去されているような戦時中の建造物や米軍の戦闘機、沈没船の存在には驚かされた。

わたしが小笠原の文化に興味を持ち、心から楽しめたのは、この講座が複数のテーマを体験させるものだったからだと、私は感じている。

2、先生や先輩、院生、個人研究者の方から動植物のお話を聞いたことだ。わたしの本科目の受講目的は、小笠原の自然をこの目で見ることだった。とくに固有種のメグロやノスリに会うのを楽しみにしていた。しかし今回の受講ではあまり固有種を見ることができず、物足りないものになってしまった。シュノーケリングでは狭い砂浜から出られず、せっかくのすばらしいサンゴ礁や熱帯魚は見れずじまいだった。二見港付近はかなり観光地化されていて、見る植物は外来種がほとんどだった。野外実習中は期待していたより在来種を観察できず、軽くいらだっていた。

だが今になってみると、動物観察よりも、小笠原研究者から聞くお話がこの授業でなければ得難い、貴重なものだったと考えている。ただ動物を見るだけならば別に今回でなくとも、また個人的に島に来ればいい話だ。今回は大学の講座として自然観察をしたため、首都大の先生や先輩から生物学だけでなく様々な分野の話聞くことができた。あれほどじっくり話を聞ける機会はそうないだろう。

3、野外講座中、もっとも不満だったことは予定が詰まりすぎていることだ。従って、島の滞在期間を二航海にするべきだと考える。

小笠原での体験はどれも貴重なものばかりだった。しかし詰まっているスケジュールをこなす中で、私はその体験をじっくり振り返る暇がなかった。出航日前日の夜に絵葉書を書かなければ、思い返すことも忘れていただろう。せっかくの素晴らしい体験をただこなすだけではもったいない。もう少し、日記をつけるくらいの時間の余裕が欲しかった。時間を作れないならば、「今日の体験を振り返る会」を就寝前または討論会のときに開いてほしい。

二航海滞在することの利点はそれだけではない。小笠原丸の見送りができるのももちろんだが、一つ一つの体験に使える時間が増え、より小笠原と向き合えるだろう。シュノーケリングでサンゴ礁を見たり、南陽踊りを最後まで見ることもできる。また、母島や聳島に行って、イルカやクジラに会うこともできる。島民との対話を設けることもできる。ナイトツアーに参加すれば、グリーンペペやオオコウモリを見られるかもしれない。

ぜひ次回の野外講座では二航海分の滞在期間と「体験を振り返る時間」を作ってほしい。

これを現地で提案しなかった理由は、このようなことを考える暇がなかったためである。

4、＜感想＞

得難い体験をした。この科目を受講して本当によかった。ただ、まだ物足りないので、もういちど小笠原へ行きたいと思う。

機械工学1年男子

1、この授業では他の都市プロと違い教授の話聞くだけの受動的な授業ではなく自身の体で感じ取る能動的な授業である。事前に外来種について調べるという課題があったのだが私は「モクマオウ」について調べた。写真や文字からどのようなものかは知っていた。しかし実際に触れてにおいをかいで、モクマオウの林をあるいてみると積もった葉の厚み、木漏れ日の明るさ、葉の硬さ、といった文字や写真からは伝わらない感覚を得た。これは他の都市プロとでは味わえない。またこれは植物に限らず小笠原の父島の文化においても同じことが言える。欧米系の島民である大平レンスさんが「私たち（島民）がお互いに戦争した。」と話していた。一瞬違和感を覚えたのだが、欧米系と日系の人間の入り混じった島であったのだということ思い出し納得した。私には戦争が別の世界の話という認識があったからなのかもしれない。私がこの授業で強く感じたのは「文字や写真で知ったものがこの実習を通して自分の経験となる」ということである。私はこれがほかの都市プロとのもっとも大きい違いであると思う。

2、私は機械工学コースで、この自然と社会と文化という都市プロはまったく専門の違う分野であったため普段接する機会のない人、学生を始め教授や他の大学の研究者と一つのテーマについてはなすことができたことがもっとも良かった。この小笠原と言う様々なものが入り混じった場所が良かったのかもしれない。観光、言語、歴史、生物。普段の生活で私がほとんど意識しないようなことを真剣に研究していること、そしてそれを私たちに語りかけてくる姿に私は無関心ではいられないという焦りを感じた。特に夜の講義の後のディスカッションでそれを感じた。専門の違う人の話は今まで深く考えてこなかったことに踏み込んでいたり、逆の意見を持っていたりとても新鮮だった。私はこうした専門外の人との触れ合いでとても良い刺激を受けた。

3、小笠原講座において一航海では短すぎると感じた。海に潜ったり、山に登ったり丸一日使っても良いと思う。時間帯によって見えてくるものが違うのではないか。また島ことばを探すことにしても島の人と会話することも考えて昼間に少し自由な時間が欲しかった。個人的に小笠原でやり残したことはたくさんある。そのためにも一航海だけではなく二航海に期間を延ばしたほうが良いのではないかと思う。現地ですそれを直接提案しなかった理由は帰宅して改めてノートや写真を見たときそう感じたからである。

人文・社会1年男子

1、「自然と社会と文化」という授業の最大の特徴は、実地での野外講座がメインであることである。他の授業の中にも野外実習を織り交ぜているものがあるが、それらはあくまでサブの位置に落ち着いており、実際は教室内の授業に重きが置かれている。

テーマとなる地域の空気に直に触れながら学習するのだから、普通の授業に比べて印象に残りやすい。旅行気分と言え言え言いすぎかもしれないが、離島での野外講座となれば自然と気分も高揚するし、楽しむことができれば身も入りやすい。環境も心構えも、ディスカッションの素材などを集めやすいものになっているだろう。

また宿泊や集団生活を伴うものなので、そのための準備や方法のスキルを磨くこと

にも繋がる。

テーマとなる地域は離島というかなり限定的な場所なので、そこで学習することは当然狭く深いものになる。しかし実際に現地に滞在できる時間は多くはないので、教員が提供するもの、学生が自主的に取り組むものを問わず、事前の学習を現地での実習の助けにすることが重要になってくるのも、この授業の特徴だろう。

2、私が本講座に参加した目的は、有名な小笠原の自然の中に実際に飛び込んでいくというものだった。美しい風景を眺めることが出来たし、固有種も外来種も含めた滅多に見ることのない生物に出会えたので、この目的はある程度達成されたと言えるだろう。

しかし、多少の不満が残っていることも事実だ。具体的な願望を言えば、もっと山歩きをしたかったし、もっと海に潜りたかったし、川で採集（持ち帰る訳ではない）もしたかったし、落ち着いて釣りもしたかった。つまり、自分にとっては物足りなかったのである。かなり我が儘な願望であることは認めるし、旅行気分に参加されてはたまったものではないと思うが、目的に照らし合わせれば、こう言うしかない。この講座は小笠原という地域を総合的に学ぶものであったので、予定にかなりの制約がつくのは仕方のないことである。そもそも遊びに行っただけではない。授業の内容には満足しているが、上で述べた点についていえば、もう少し満足のいく小笠原紀行にしたかった。

3、2でも述べているが、今回の講座は少し不満の残るものだった。原因は、時間の少なさである。今回のように最終日の午前中だけではなく、自由行動が出来る日を一日作ってみるのはどうだろうか。朝食終了後から夕食準備前まで、という具合である。夕食終了後はレクチャーやディスカッションを入れても良い。一日の自由時間を与えれば、学生は自主的に島内を散策し、予定で決められた授業では得られないような収穫を得てくるだろう。これは今回の課題でいえば、my Ogasawara などに繋がりやすい。

現地で提案しなかった理由は、その時点で提案したところで予定は変えられないと思ったからだ。予定にある授業の多くは、現地の人々の協力の上に成り立っている。それを今さら変更しようというのは失礼だろう。かなり詰まった日程だったし、自由時間を増やすのは難しかっただろう。全ての日程が終了した後、このような授業に対する改善案を出す機会があることは予想していたので、その時に提案すればよいと、現地では考えた。

4、＜感想＞

とても楽しかった。旅というのは素晴らしい。小笠原には何度でも行ってみたい。今度は全部自由時間にして、十割満足したい。